

所によると、西藏が甘州地方を占領した西紀八世紀の半頃から九世紀の半頃にかけて、この甘州の修多(sutra)寺で、西藏語や梵語の佛典を、漢文に譯したものが澤山あつて、其の多くは法成の手に成つて居る。法成は西藏語の Chos Grub に當るから、^{カンジュール}甘珠爾の中にある金光明經や觀音に關する二種の經などを譯して居る。Gos-Chos-grub と同人だらうといふ。此の滅盡記の譯された時代に就いては、九世紀の初半と見て居る。

Bibliothèque Nationale のペリオ氏蒐集敦煌出土漢文書の目録にも、法成譯の瑜伽論、瑜伽師地論、薩婆多宗五事論、同別本、及び此の滅盡記などが見える。當時甘州の如き、政治の上からも文化の上からも、諸國の勢力を感受するに鋭敏であつた場所に居つた西藏人が、藏文は無論のこと、漢文にも梵文にも通じて、各々一方から他方の傳譯に従事して、その業績を今日に傳ふるを得たのは、甚だ興味ある事件である。然も漢文の藏經中には其の譯の收められなかつたのが、偶然の事情で、かく世の中に出て、千載の後人を驚かすのは、傳統的學問に對する一種の脅威であり、また諷刺でもあるやうに思はれる。自分は獨り此の滅盡記のみならず、この譯師の手に成つた他の遺文をもすべて現存のものと比較して、發明の資に供することにする積りである。

此の寫本は卷軸の形で、紙の大きさ上下八寸五分、首尾の題記を入れて六十九行、そうして寺本師の譯出された于闐國懸記第一章の末、即ち第十頁の五行目||氏の註記による原本四四七頁を終つて四四八頁の初の部||で終つて居る。原典乃至ロックヒル氏の抄譯、寺本氏の全譯など、比較して研究の資に供すれば、發明する處甚だ多いと思ふ。寫眞は自分が巴里で寫したものの、原板は今東京モリソン文庫の所藏に係る。

(史林第八卷第一號、大正十一年十二月十二日稿)